

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00175

研究課題名（和文）西欧中・近世における思考・記憶の実践とイメージをめぐる歴史人類学的研究

研究課題名（英文）Historical-anthropological Study on Thinking / Memory Practices and Images in the European Medieval and Early-Modern Times

研究代表者

水野 千依（MIZUNO, Chiyori）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40330055

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋近代に措定された「芸術」概念を問い直し、中近世のキリスト教文化における「像」のあり方を歴史人類学的視座において再考した。とくに、フラ・アンジェリコから遡り中世に盛んに描かれたダイアグラムの形象に注目し、古来の「記憶術(ars memoriae)」に基づく霊的修養、聖書註釈、徳の教化、神秘主義的幻視や予言という領域において、「像」が人間の思考・記憶・想像力にいかにか能動的にはたらきかけ、力あるものとして息づいていたのかを分析した。従来、「芸術」として理解されてきた作品を、人間の思考や記憶の実践と切り離し得ないものとして人類学的次元で捉え直し、人間と「像」との存在論的關係を析出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

初期ルネサンスの画家フラ・アンジェリコの作品に描かれた特異な概念図を端緒として、初期キリスト教時代のエクフラシス（言語による絵）、そして中世の視覚文化に流布した記憶術的概念図にまで遡りながら、稀有な作例の発掘とともにダイアグラムの形象の系譜を解明し、そうした概念図が古来の記憶術に基づく霊的实践や思考のなかで担った固有の機能を明らかにしたことは、美術史や歴史学だけでなく、人類とイメージとの關係を存在論的に問い直す人類学的問いにも応答する学際性をそなえており、学術的意義を有する。美的価値にとどまらないイメージの豊かな機能を掘り起こすことは、社会一般のイメージ理解にも資する点で社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study reconsidered the concept of "art" established in the modern Western world, and reflect the role of "images" in medieval and early modern Christian culture from a historical-anthropological perspective. In particular, I paid attention to the diagrammatic images that were widely drawn in the Middle Ages, and I analyzed how "images" have actively influenced human thinking, memory, and imagination, and how they have lived as powerful actors in the spiritual training, biblical commentary, cultivation of virtue, mystical visions, and prophecies, that were all based on ancient "ars memoriae". Images that have traditionally been understood as "art" have been reconsidered from an anthropological perspective as something that cannot be separated from the practices of human thinking and memory, and the ontological relationship between humans and "images" has been clarified.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ダイアグラム 記憶術 フラ・アンジェリコ エクフラシス 歴史人類学 サン＝ヴィクトルのフーゴ
— オピキヌス・デ・カネストリス 否定神学

1. 研究開始当初の背景

近代に学問として制度化された美術史は、脱植民地主義からグローバリゼーションの時代へと移行する 20 世紀において、西欧中心主義的な「芸術」概念を問い直し、その近代的な学的前提を乗り越える視座を模索してきた。1970 年代以降の「ニュー・アート・ヒストリー(ズ)」を経て、90 年代には加速するグローバリゼーションと情報化の波を受けて、「美術史」に代わるより包括的な「イメージ研究」(英米圏のヴィジュアル・スタディーズ、ヴィジュアル・カルチャー研究、ドイツ語圏の「イメージ学」)が相次いで提唱された。こうした中で、西欧的な「芸術」概念を人類に普遍的な「イメージ」という概念へと開き、その価値や意味や機能をグローバルな視点から間文化的に理解しようとする「イメージ人類学」が囁かれ始める。人類全体を包括するより普遍的な地平でイメージ理論を構築する必要性が唱えられたのだ。多様な方法論が展開されている「イメージ人類学」ではあるが、なかでも筆者は、無文字社会から西欧近代に至る記憶とイメージをめぐる一般人類学を提唱する C・セヴェーリの著作『キマイラの原理』(2017 年、白水社)を翻訳するなかで、同種の試みを過去の文化に対して歴史人類学的に遂行する可能性に導かれた。そこで本研究では、イメージに依拠する思考実践に結びついた存在論的次元の一つとして、西欧中近世の霊的修練や聖書註釈などに深く関わる記憶術的ダイアグラムを対象に、その機能と変容を人類学的視座において分析するという課題を構想するに至った。

ダイアグラムに注目した契機は、初期ルネサンスの画家フラ・アンジェリコが最晩年に手がけた「銀器収納棚」装飾(フィレンツェ、サン・マルコ美術館)において、キリストの生涯を遠近法に基づいて描いた物語サイクルの最初と最後に、それとは相容れない平面的で図式的なダイアグラムが配されていることに違和を感じたことにある。意識的に選択したと思われるダイアグラムの表現がいかなる意味や機能を担ったのかを問うことから、中世に霊的修養や聖書註釈等で利用されたダイアグラム、さらには初期キリスト教に遡る宗教テキストに言語的描写によって描かれたエクフラシス的「絵(pictura)」の存在に導かれ、現在では忘却されたイメージに依拠する思考実践の存在を解明する必要性を感じるに至った。

2. 研究の目的

西洋における記憶術の淵源は、古代ギリシアの修辞学的伝統に求められる。そこでは、記憶によって容易に再構成できる順序で生起する一連の建築的な「場(locus)」を精神内に築き、そこに記憶すべきものを喚起する「賦活イメージ(imagines agentes)」を配する「建築的記憶術」が探究された。この技術はローマ時代後期には次第に衰退し、13 世紀になってようやく再発見される。それまでは、古代の建築的な記憶の「場」は中世修道院文化のなかで質的变化を蒙り、「記憶」は神の認識へと至る精神的修養において新たな価値を付与された。そこでは独自の記憶術が練り上げられ、より二次元的で平面的なダイアグラム、いわゆる修辞学的な「絵(picture)」ないし「視覚的概念図」が記憶や思考や認識を補助した。

本研究は、すでに研究の蓄積のある古代の建築的記憶術に比べて、いまだ十分に研究し尽くされていないといえないこの中世的記憶術を、宗教書や修道院文学にみられる言語的描写(ekphrasis、ラテン語で descriptio)によって描かれた非形象的な「絵(pictura)」と、写本彩飾、板絵、壁画、モザイク画などに現実に形象化された様々な図像作例とを包括的に調査することを目的とした。

特に注目したのは、記憶術が「暗記」のための機械的技術ではなく、新たな思考・解釈へと至る創造活動を促すヒューリスティックな認識装置(cognitic machine)であった点である。古代より知識人たちは、都市、庭園、建築といった「場」を、知を収集し分類し記憶するための複雑な認識スキームと捉え、精神内に壮大な仮想空間を築き、その各所に記憶を喚起する「賦活イメージ」を配してきた。架空の「知の空間」「建築的記憶術」における三次元空間であれ、中世的記憶術における平面的ダイアグラムであれ、いずれも不動にして不活性な構築物ではない。むしろそれらは、精神内で各部位を仮想的に経巡る動性に満ちた空間である。記憶を促すイメージに各所で出会い、視覚のみならず情動や共通感を刺激されることで想起が促され、賦活イメージに凝縮された知を敷衍拡充し自由自在に再結合することにより、創造性豊かな思考が活性化される。心の目を鍛えること、それは、PC やインターネットの普及により脳外にメモリーを蓄積できる近代以降の我々が忘却してしまった精神様態にほかならない。我々には想像さえし難い空間がかつては精神内に築かれていたのであり、そこに配されたイメージは記憶や感情や共通感を揺さぶり、生き生きと息づいていた。

本研究は、そうした近代以前の「記憶」を中心とする思考・認識活動をふまえつつ、特に中世から初期近世へと至る文化変容のなかで、古代の建築的記憶術の再興に伴い、記憶術、そしてそれに関わる精神内の空間やイメージが変貌する過程を、残存する図像およびテキストによるエクフラシスの分析を通じて明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、主として以下の三つの手法を軸に考察を行った。

初期キリスト教に遡る教父文学等のテキストにエクフラシスによって描写されたダイアグラムを調査し、それらダイアグラムを心のなかに描くことを推奨した霊的实践について解明する。

ついで、中世から近世初期の霊的修養において興隆をみた記憶術に基づくダイアグラムのイメージの機能、さらに他の心的作業におけるその波及を、広範な図像資料およびテキスト分析により解明する。

特に、実際に形象化された概念図が登場し始め、それらを用いた視覚的聖書註釈や霊的修養が最盛期を迎える12世紀以降を重点的に調査する。サン＝ヴィクトル学派を代表するサン＝ヴィクトルのフーゴーが『ノアの道徳的箱舟』『ノアの神秘的箱舟』で構想した「箱舟」、神学者ボワティエのペトルス（ペトルス・ピクタウィウエンシス）の『キリスト教系図史要覧』を彩る多様なダイアグラム、そしてフランシスコ会士ヨハネス・メテンシスが考案したダイアグラム・コレクション「神学の鑑」へと収斂する各種ダイアグラムの系譜を追うとともに、それらがいかに機能し受容されたのかを解明する。さらにヒルデガルト・フォン・ピンゲンの神秘主義的幻視、フィオーレのヨアキムの終末論的予言、オピキヌス・デ・カニストリスの神秘的啓示を例に、多様な心的作業における概念図の機能を検証する。

13世紀以降、アリストテレスの復興とともに古代の「建築的記憶術」が再発見されていく経緯を精査し、新旧の記憶術がいかに変容しつつ初期近世へと受け継がれていくかを検証する。

特にドミニコ会の伝統において古代の建築的記憶術が復興される経緯を検証し、その影響を受けて描かれたと考えられる図像を収集・検証する。さらに、ドミニコ修道会の画僧フラ・アンジェリコがフィレンツェのサン・マルコ修道院僧房に手がけた一連の壁画装飾、そして晩年の「銀器収納棚」装飾を中心に、中世的ダイアグラムの伝統を継承しつつも、古代の建築的記憶術がいかにルネサンスにおいて復興されていくのかを検証する。

内面に構築するイメージを外在化させた図像を初期近世に至るまで掘り起こし、解釈を試みる。

ルネサンスからマニエリスムにかけて複雑を極める記憶術の革新をふまえ、関連図像の調査を続ける。とくに具体的な図像を伴わない「白壁/白地」や「非形象性」にも着目し、神の超越性と表象不可能性に対する人間の認識・記憶の限界という問題を否定神学的思想に照らして考察する。また、ダイアグラムや記憶術的概念図がマニエリスム期には芸術理論を講じる人文主義的テキストにも息づいていく点に着目し、ジャン・パオロ・ロマッツォの『絵画殿堂のアイデア (*Idea del Tempio della Pittura*)』(1590)で描写される記憶術的建築にも目を向ける。

以上の考察をもとに、イメージに依拠する西欧中近世の人間の認識、思考、記憶、想像力の実践を存在論的に解明し、最終的には単著（仮題『記憶の櫃』）として成果を公刊することを計画した。

4. 研究成果

本研究により、古代から中世、そして13世紀以降の記憶術の変容を解明するとともに、ダイアグラムの形象がとくに中世キリスト教の宗教実践や視覚的聖書註釈、予言や幻視体験など多様な心的作業を導く重要な存在であったことを具体的に明らかにすることができた。コロナウイルス感染拡大のため、当初、予定していた海外での作品調査、写本調査は困難であったために研究期間を延長することとなったが、最終年度に海外調査を実現することができた。

以下、研究方法に沿って成果を報告する。

研究方法：初期キリスト教時代に遡るテキストにおいて、言語的描写（エクフラシス）によって構築された聖書の寓意的建築（モーセの幕屋、エゼキエルの神殿、ソロモンの神殿、ノアの箱舟、ヨハネの天上都市など）を読者が心に描くという心的作業、および長らく絵画化されなかったこれらの建築や都市が12世紀頃から絵画化されていく経緯を、**発表** および**図書** で明らかにした。心に描くべきこれら建築は、いずれも神によってその原型が与えられたもので、原罪を負った人間と神との和解という寓意を有している。その原型に倣って信者が各々の心のなかに霊的建築を築くという行為は、贖罪と至福直観を求める霊的修養のなかで魂の浄化を導く重要なプロセスであったことが浮き彫りとなった。

12世紀以降に流行を見る形象化されたダイアグラムと霊的修養については、**論文** のなかで、ヨハネス・メテンシスが考案したダイアグラム・コレクション「神学の鑑」のうち、「叡智の塔」を重点的に取り上げ、ダイアグラムの具体的な解読を通じて、信者に働きかけてくるイメージの行為遂行的側面を明らかにした。

発表 では、ロンドンの北セント・オールバンズ大修道院のベネディクト修道会士マシュー・パリスの『大年代記』(13世紀)に描かれた聖地へのロードマップともいえるべき「世界地図(*mappa mundi*)」とキリストの「聖顔」を取り上げ、修道院に定住誓願した修道士たちが至福直観を希求し、心のなかで聖地へと赴くために実践した「心の巡礼」の旅程と地図の形象の問題を考察した。

サン＝ヴィクトルのフーゴーの「ノアの箱舟」については、**論文**、**発表**、**図書** およびで多角的に論じた。フーゴーは『ノアの道徳的箱舟』『ノアの神秘的箱舟』のなかで、脆弱な人

間の精神を修復し神に近づくために心のなかに構築する建築として「ノアの箱舟」を選択し、その構造を詳細なエクフラシスによって綴るとともに、それを時間的にも空間的にもキリスト教的宇宙全体を包含する壮大なシステムとして構想している。本研究では、フーゴの別の論稿「この世の虚しさについて」の内容にも照らしつつこの記憶術的ダイアグラムを解読した。フーゴは、心のなかにこの広大な箱舟を建築し、その各部を経巡り、各所に配した賦活イメージの導きにより百科全書の知を収めていく作業を、聖書の字義的解釈（＝読書 *lectio*） 寓意のおよび転義的解釈（＝瞑想 *meditatio*） 神秘的解釈（＝観照 *speculatio*）という註釈作業や霊的修養のレベルと結びつけているが、この箱舟というダイアグラムは、最終的にキリスト教者がたどり着くべき神の観想（*contemplatio*）にまで導くことはないとしている。彼は多くの労苦とともに建設し経巡ったこの宇宙論的ダイアグラムともいべき箱舟の頂点に立ち、世界の森羅万象を俯瞰する視線を提示するが、擬ディオニシオスの否定神学的思想を継承しつつ、その境地がいまだ観照（*speculatio*）の次元にすぎず、神秘にふれる観想（*contemplatio*）に向かうには、形象世界を超えて、その彼方へと向かわなければならないとする。ここから本研究は、「形象」を否定し超越する「無形象」「超形象」という次元を措定する必要性を認識することとなった。

さらに**発表**、**図書**では、フーゴの思想を継承した14世紀のアヴィニオン教皇庁書記オピキヌス・デ・カネストリスにも目を向け、統合失調症からの回復を契機に、自身の体験した神の神秘的啓示を地図形象（マクロコスモス）と人間形象（ミクロコスモス）を複雑に重ね合わせた宇宙論的ダイアグラムへと形象化した素描群の解読も試みた。

研究方法：フーゴにおいて考察した否定神学的な「無形象」「超形象」の次元をさらに掘り下げるべく、フラ・アンジェリコがフィレンツェのサン・マルコ修道院ドルミトリオ（僧房）に装飾した壁画群を再考し、**論文**として公表した。本研究の導きの糸でもあるフラ・アンジェリコは、ルネサンスの芸術的革新にふれつつも、中世のダイアグラムや記憶術に根ざした霊的修養を重視し、それに資する図像を独自に構想した。ドルミトリオに描かれた形象は、キリストの生涯の一場面を主題とする物語画であってもきわめて抽象性が高いが、特に注目したのは、描かれていないフレスコの上塗り（イントナコ）が絵画形象内にそのままに残されている作品があること、また壁画の周りに広大な無形象の白壁が広がる修道院の特殊な場の問題で、これらを否定神学的思想に照らしつつ、「類似形象／非類似の形象／無形象」という三概念を独自に措定して解釈を試みた。

研究方法：ダイアグラムや記憶術の概念図がマニエリスム期にいかに変容を遂げていくかという問題を**論文**で考察した。16世紀の芸術理論家ジャン・パオロ・ロマッツォの『絵画の殿堂のアイデア』（1590）を取り上げ、中世においては倫理的な徳の形成と霊的修練として展開してきた「心の建築」というトポスが、芸術理論という人文主義的領域にも継承されたことに着目した。ジュリオ・カミッロの『劇場のアイデア』などに想を得て、ロマッツォが書物の中にペンで建立する絵画の壮大な殿堂も、新プラトン主義的なオカルティズムという文脈において、芸術のアイデアへと心を高める機能をそなえ、中世の霊的修養の人文主義的展開を考察する重要な布石となった。

さらに、ダイアグラムという無機的イメージが人間の思考や記憶に生き生きと働きかけてくる点を人類学的次元で考察する上で重要となる「イメージの行為主体性」や「物質性」の問題については、編者としても関わった**図書**において、基調論文および個別論文という形で論じた。また、本研究の根底にあるイメージ人類学的視座について、**図書**で担当した項目において概略した。

研究期間全体を通じて、中世・ルネサンスの霊的修養において重視されたダイアグラムの形象と、それが導く思考や瞑想や神秘体験を様々な事例研究において掘り下げることができた。初期キリスト教以降の修道院文化において連綿と継承された有形・無形のダイアグラムに基づく聖書註釈や霊的実践を解明し、サン＝ヴィクトルのフーゴが心に描くことを推奨したダイアグラム、それ以降、現実に描かれ始めるダイアグラムの形象の展開、そして預言者フィオーレのヨアキム、幻視者オピキヌス・デ・カネストリスなどの神秘主義を経て、変容とともにルネサンスに継承されていく潮流を浮き彫りにした。本研究の成果は、単著として2025年に刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 水野千依	4. 巻 49
2. 論文標題 フラ・アンジェリコと無形象 サン・マルコ修道院ドルミトリオの白と闇	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 58, 65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 4
2. 論文標題 ジャン・パオロ・ロマッツォ『絵画殿堂のアイデア』（ミラノ、一五九〇年）：抄訳・註釈	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青山学院大学文学部附置人文科学研究所論叢	6. 最初と最後の頁 147, 158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 48
2. 論文標題 神の像（imago Dei）と非類似——失われたに姿をもとめて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿島美術財団『美術講演会講演録』	6. 最初と最後の頁 37, 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 40
2. 論文標題 徳の伽藍——中世キリスト教における魂の装飾	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野千依	4. 巻 LXII
2. 論文標題 書評「越宏一編『ヨーロッパ中世美術論集5 中世美術の諸相』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地中海学研究	6. 最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 水野千依
2. 発表標題 キリスト教中世の世界地図(mappa mundi) 鳥瞰的眺望とその彼岸
3. 学会等名 東大人文・熊野フォーラム in 本郷「羽黒と熊野 : 聖地と絵図」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 水野千依
2. 発表標題 「Theoriaへの道 (ductus) とvarietas サン=ヴィクトルのフーゴーからオピキヌスへ」
3. 学会等名 科学研究費 基盤 (B) 「初期近代西欧の視覚芸術における多様性と発想: 美術と修辞学の創造的共同」 (代表: 桑木野幸司 課題番号 20H01208) 主催シンポジウム「初期近代の文芸・芸術におけるvarietasとinventio」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水野千依
2. 発表標題 「天の原型を計測する 悔悛と救済への道程 (ductus)」
3. 学会等名 新宮市・東京大学大学院人文社会系研究科連携協定締結記念 東大人文・熊野フォーラム (第二回) 『災いと救い: 聖地の生成と変容』
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 辻成史 編 (水野千依)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 400
3. 書名 はるかなる「時」のかなたにー風景論の新たな試み	

1. 著者名 キリスト教文化事典編集委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 790
3. 書名 キリスト教文化事典	

1. 著者名 木俣元一、佐々木重洋、水野千依	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 680
3. 書名 聖性の物質性	

1. 著者名 木俣元一、近本謙介 編 (水野千依)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 728
3. 書名 宗教遺産テキスト学の創成 (第二編第四部「天の原型を計測する 有形・無形宗教遺産としての聖地エルサレムとその複製」)	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 上智大学中世思想研究所（編訳）、水野千依（巻末エッセイ「心のなかに絵を描くー一魂の階梯と形象の彼方」）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 624
3. 書名 中世思想原典集成 精選4 ラテン中世の興隆2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------